

財団法人 8020 推進財団

平成 22 年度 歯科保健活動助成交付事業報告書抄録

1. 事業名：特別養護老人ホームにおける入所者の食形態と咀嚼回数の実態調査

2. 申請者名：社団法人 佐世保市歯科医師会

代表者名 七熊 正

担当者名 太田 信知

3. 実施組織：社団法人 佐世保市歯科医師会

4. 事業の概要：現在日本は超高齢化社会になり、5人に1人近くが65歳以上となっている。健康長寿をめざすには『食べること』が重要な要素になると思われ、QOLの維持向上に必要不可欠であると思われる。ところが高齢者、特に要介護者になるにつれて咀嚼、嚥下機能は低下し、誤嚥、窒息などの問題が起きることも少なくなく、要介護者における食形態および咀嚼機能の解明を行う必要がある。しかし要介護者における咀嚼回数等の咀嚼機能はまだ明らかにされていない。そこで今回特別養護老人ホームにおいて食形態および咀嚼回数の実態調査を行った。

5. 事業の内容：長崎県佐世保市内の特別養護老人ホームに今回の検証の趣旨を説明し、同意を得られた1施設にて行った。対象者は計測装置装着可能で、かつ本人または家族の同意が得られた37人とした。対象者に咀嚼回数計測器（日陶科学株式会社製かみかみセンサー）を装着し、同一献立を摂食してもらい、主食と副食の組み合わせを常食と一般菜、常食と軟菜、粥と軟菜、粥と超みじん菜、ミキサーにそれぞれに分類し、咀嚼回数および咀嚼時間を計測した。また1秒毎の咀嚼回数を咀嚼頻度として算出比較した。

6. 実施後の評価（今後の課題）：計測を行った37名のうち、計測装置装着不備または途中中断などにより測定できなかった対象者を除いた19名で分析を行った。咀嚼時間においてミキサーが他と比較して長くなることが示された。平均咀嚼回数は一般の咀嚼回数と比較するとやや多い結果となった。また有意差はみられなかったものの咀嚼回数はミキサーが少ない値を示した。また咀嚼頻度でも同様のことが示された。これらはADLの低下や認知症の進行などによる摂食機能の低下または咀嚼効率の低下などが影響しているのではないかとと思われる。今後は口腔内の状態やADLおよび認知度と咀嚼回数の関係等を明確にする必要があると思われる。また最後まで口からおいしく食べていただく為の楽しく食事ができる食形態の工夫等を検証していきたい。